

新羅は日々セルティに愛を告げている男だ。その結果としてセルティと恋人同士になれたという経緯があるので、告白を推奨するのは当然なのだろう。

「まあ、僕は馬に蹴られる趣味はないから口出しはしないけどね。けどさ、思いを秘めたとして、帝人君に恋人ができたときに祝福する覚悟であるのかい？」

「……」

正直に言えば、そこまで考えたことはなかった。けれど、言われてみれば帝人が今後、誰かと恋人関係になる可能性は十分ある。

なにしろ、あんなにも可愛いのだ。誰が彼に恋してもおかしくない。

帝人に恋人ができる未来。考えたくはなかったが、一応想像してみる。

帝人が、静雄以外の誰かに笑いかける。頬を赤らめて、熱の含んだ瞳で見上げて。そうして。

ばかり。

「……テーブルを破壊しないでくれないかな」

少しばかり勢いが余って岸谷家の応接間にあるテーブルが真つ二つになった。けれど、今の静雄にとってはどうでも良いことだ。

(冗談じゃねえ)

嫌だ。絶対に、嫌だ。許せない我慢できない耐えられない。嫌だ嫌だ嫌だ。

けれど、そんな日もきつと来るのだろう。

だって帝人は可愛い。とてつもなく、どうしようもなく、ものすごく、可愛い。

「……静雄にはそんなに帝人君が可愛く見えるんだねえ……」

どうやら帝人がいかに可愛いかが、口に出していたらしい。しみじみと感心する口調で新羅が言う。

「見える。可愛いだろ、実際」

「あのね、静雄。世間一般論で言えば、帝人君の容姿は平々凡々、と言うんだよ。可愛いと思うのは君が彼に恋しているからで、まあつまり恋で目が眩んでる訳だね」

平々凡々。言われて、理解はできるが納得できない。だって帝人は本当に可愛い。性格も、容姿も、言動も、何もかもが。

「私も恋に目が眩んでいるから、言いたいことはわかるけどね。ああセルティ、僕は永遠に君の虜だよ！」

すると新羅にはセルティがこの上なく可愛らしくみえるのだろうか。

言動はともかく、彼女には顔がないが、そんなことは新羅にとって何ら問題にはならない。

新羅の惚気話は聞き慣れていたもので、いつも通り聞き流す。

ふと柱時計に視線を向ければ、すでに夕方だった。慌てて立ち上がり、帰ることにする。もう帝人が夕食準備を始めているかもしれない。

「帰る」